

仏典にみる五障三従説とその超克

——法華経・日蓮の視点より——

穂坂 悠子

周知のように、多数の仏教経論には、女人の五障(梵天・帝釈天・魔王・転輪聖王・仏に作れない)、および三従(幼くしては親に仕え、嫁いでは夫に仕え、老いては子に仕え、一生従属的な生活を送る)の説示が確認できる。これらの教説をもつて、仏教を女性差別的宗教であると捉える立場もある。

しかし仏典を広く精査すると、初期の経律(『スッタニパータ』『律蔵小品』『サンユッタ・ニカーヤ』『デーリーガーター』等)では一貫して、男女の差別を超えた普遍的な成仏得道が説かれている。ここに仏教の成仏論の根本義があると推察される。

ところが、仏教教団の出家者の、出家以前の身分階級はバラモンが大半を占めていること等により、インド社会特有の差別思想の混入を招き、部派仏教以降に至ると完全にバラモン教の影響を受けて、女性差別的な思想・表現が混入してきたと見ることができ。この中で、五障・三従説が仏教に採り入れられたと思われる(植木雅俊『仏教のなかの男女観』等参照)。特に五障説については従来、総合的な研究が充分になされていないので、本稿では、この点を考慮しながら検討する。

仏典に五障説が見え始めるのは紀元前一世紀頃、摩訶波闍波提の出家を許可する叙述に挿入されることより始まる(『中阿含経』『中本起経』『彌沙塞部和醯五分律』『大愛道比丘尼経』等)。しかしながら女人の成仏を徹底的に批判するだけでは女

人を教化する上でマイナスにしかならないので(『大智度論』)、女身を男身に転じて(変成男子)、その後に成仏に至るとする説示も繰り返される(『増一阿含経』『正法華経』『妙法蓮華経』『添品妙法蓮華経』『大哀経』『仏説龍施女経』『超日明三昧経』『大智度論』等)。この内、空思想から男女差別を超える立場を示す大乘経論も見える(『正法華経』『妙法蓮華経』『添品妙法蓮華経』等。特に『超日明三昧経』が徹底している)。また、変成男子後の授記をおこなう典籍(『仏説龍施女経』『超日明三昧経』『大智度論』)に対し、法華経は変成男子後の速疾の成仏を示す(『正法華経』『妙法蓮華経』『添品妙法蓮華経』)。法華経は徹底した一乗思想を説く経であり、元来、男女の別に強くこだわることなく男女の成仏を説くのであるが(序品・法師品・常不軽品等)、提婆品の龍女成仏の箇所では、女人成仏を全く受け付けない部派やインド社会等に配慮し、仮に変成男子を示していると判断される。なお、女身のまま五障を超越する例としては、『菩薩処胎経』、『仏説宝雨経』を挙げることができる。これらの説示は女人成仏の歴史上、評価に値するものと思われる、法華経の根本的立場と通ずるものとも推察される。

三従説の典拠は『マヌ法典』(紀元前二世紀頃成立)であり、インド古来の觀念・慣習に基づく女性観であると伺われる。三従説は紀元前二世紀前後に仏典に初めて登場したと思われる、部派分裂以後の展開の中で女人不成仏説に連なる思想の一つとして形成されたかと推測される。しかし種々の仏典を管見した限り、結局は「女人は仏道修行において三従を超克する」と明記されている。大乘の経論を中心に、明らかに三従の超克が指向

されている。三従説は五障説に比すれば、一貫して超克が可能
な女性差別観念であったと思われる。

大乘諸経典では、諸法空・一乘(法華経等)・如来蔵(『勝鬘
経』)等の思想に基づいて、男女の差別を超えた普遍的成仏を
提示しようとする流れが生じる。この中で五障・三従説も超克
され、最初期の仏典同様、普遍的成仏が開けてくるものと思わ
れる。その極まった形は徹底した一乘思想を説く法華経にある
と言える。法華思想は智顛・湛然・最澄等を経て展開され、日
蓮に至って五障・三従を超えた女人即身成仏が定まるものと思
われる。

日蓮の朝鮮仏教認識

福士 慈稔

日蓮聖人の著作書簡類(『昭和定本日蓮聖人遺文』全四巻)
の中に「仏法自百済国渡」として百済から仏教が伝わったとす
る記載は、四一歳著作の『教機持国鈔』から五八歳の『中興入
道御消息』まで、著作七、書簡十二にみられる。著作と書簡の
区別は判断が難しいものもあるが、著作は日蓮聖人の内証法門
の開示、法華経流布、諸宗対破、または門徒教育の論拠となる
ものであり、書簡はそれらを論拠として記されたものであるこ
とを考えれば、日蓮聖人の書簡は、日蓮聖人の書簡に関する先
行研究を鑑みれば、書簡は教学書とも捉えるべきものである。
「仏法自百済国渡」という記事が書簡にも見られるということ
は、「仏法自百済国渡」ということを自らが認識し、その認識
を信徒にも共有させようとする意図が窺われるものである。

尚、それ等の資料から窺われることは次の点である。

一、日本に於ける仏教伝来年次は、五五二年十月十三日であ
る。

二、百済に於ける仏教伝来年次は、四五〇年頃である。

三、百済から初伝時に法華経も伝わったが、日本に於ける法
華経流布の端緒は聖徳太子である。

日蓮聖人の著作書簡類(九部・含『一代五時継図』)にみられ
る朝鮮三国僧は、百済僧では観勒・慧観、高句麗僧では恵慈・
恵准、新羅僧では智鳳・審祥・神昉の名がみられる。これ等の
引用は章疏の引用ではなく、全て名を挙げているだけである
が、その意図するところは、宗派・教学の伝来である。百済の
観勒が三論・成実を伝えたとし、また恵観も日本で三論宗を弘
めたとする。新羅僧の智鳳は法相宗を、審祥は華嚴宗を伝え、
それぞれが日本初伝であるとする。これは当時の日本仏教界の
認識であり、日蓮聖人は当時の日本仏教界の認識を正しく承け
ていたに過ぎないのであるが、注目されるのは『曾谷入道殿許
御書』『妙密上人御消息』『本尊問答抄』のような信徒への書簡
にもみられることである。

日蓮聖人の朝鮮章疏の引用は、『二代聖教大意』(太賢一回)、
『万法一如鈔』(元暁一回)、『注法華経』(元暁三回、義寂二回、
太賢三回)にみられるが、元暁の場合は最澄『依憑天台集』
『守護国界章』、義寂の場合は源信『一乗要決』からの孫引きで
あり、日蓮聖人が独自に手にした可能性があるのは太賢章疏
(『梵網経古迹記』)だけである。日蓮聖人に朝鮮章疏の重用度
は窺えない。